

通いの歌の一様相

——万葉集卷十一・二四二五の歌私解——

坂 本 信 幸

二四九二)

富士の嶺のいや遠長き山路をも妹がりとはげけによばずぬ(14

・三三五六)

まかなしみさ寝に吾は行く鎌倉の美奈の瀬河に潮満つなむか(14

・三三六六)

等の歌には、そのような、万葉人の生活の一端が覗かれる。今問題

にする巻11・二四二五番の

やまどの ことはやまを うまほあれど かぢよりあてし なおもひぢぢた
山科 強田山 馬躰在 歩吾来 汝念不得

も、そのような通いの事情を歌った一首であるが、この歌は周知の

ごとく、古今和歌六帖・拾遺和歌集・古采風体抄・俊頼髓脳・夫木

和歌集に伝えられ、また、源氏物語の引歌としても

おなじ御さわがれにこそおはずなれ。今宵の罪には、代りきこえ

て、身を、いたづらになし侍りなむかし。木幡の山に、馬はいか

一

万葉集の恋愛歌の中には、恋人のところに通う時のことを詠んだ歌が、多数見られる。夜の訪れる頃、万葉人は、或は馬に乗り、或は徒歩で、野山を越えたり、瀬や橋を渡ったり、各自恋人の待つ処に通ったことであろう。

此月の此処に來たれば今とかも妹が出で立ち待ちつつあるらむ

(7・一〇七八)

遠くありて雲居に見ゆる妹が家に早く到らむ歩め黒駒(7・一二

七二)

妹がりと馬に鞍置きて生駒山うち越え来れば紅葉散りつつ(10・

二二〇一)

思ふにし余りにしかば鳩鳥のなづさひ来しを人見けむかも(11・

通いの歌の一様相

一

通いの歌の一樣相

が、侍るべき。いとゞ、物の聞えや、さはり所なからん。

〔総角〕薫の匂宮に対する会話

嶺の雪みぎはの水踏み分けて君にぞまどふ道はまどはず

木幡の里に、馬はあれど、

〔浮舟〕匂宮が浮舟にわたす歌

のように表現され、謡曲通小町にも引かれるなど、通う歌の代表的な一首として、古くから人々に親しまれてきたものである。しかしながら、万葉集における歌としての、二四二五の歌の解釈については、従来の説は甚だ曖昧であり、あまり納得ゆく解釈は示されていない。すでに、大浜巖比古先生は「徒歩より吾が来し」と「馬つまづくに」〔天理大学学報〕第十三集〕という論文において、従来の諸説の難点を指摘し、民俗学的解釈による新解を示されたのであったが、私には、なお大浜説にても納得がゆかず、検討の余地があると思うので、ここに卑見を述べる次第である。

二

この歌の解釈で問題になるのは、前掲大浜論文にも言うごとく、「馬はあれど徒歩より吾が来し」と「汝を思ひかねて」との関連であるが、ことに、「徒歩より吾が来し」の表現のよって来たところだが、問題とならう。この点について、従来の諸説は大きく分けて

二

(1) 馬を用意する時間を惜しみて徒歩にしたとするもの（時間説）——代匠記・古義・略解・私注・全註釈等、従来の諸説のはほとんど

(2) 馬の足音によって他人に悟られることを気にして徒歩にしたとするもの（対人説）——（折口）口訳・（沢瀉）注釈

(3) 馬で来ていても途中で馬がつまづきでもしたら、引き返さなくてはならない風習があるので徒歩にしたとするもの（風習説）——前掲大浜論文の説

の三つに分けることができる。^①(1)については、大浜論文にも指摘のごとく、馬の用意をする間も待ち切れなく思うのであるならば、それだけ早く、相手に会いたいわけであろうから、徒歩にするよりも、早い馬を用いるはずである。馬の用意をする間の、じれったさ、もどかしさということも考えられようが、これは、「それはそれなりに、別の表現になるべきで、それが直ちに『歩いて来た』といふことに続くのは、どうも不自然で、論理的にもへんに思はれる」(前掲大浜論文)と見るのが妥当であろう。(2)の解釈についても、大浜論文の「女の家の前まで馬をかって乗りつけるのであればともかく、途中の木幡の山路を越える間ならば馬でも差支へはあるまい。しかも女の許に通ふのは夜であるのが普通である。人の目にはつき難い。たとひ馬を引出したり、或いは馬に乗ってゐる所を、

他人に見られたとしても、それがすぐ特定の女の所へ通ってゆくといふことにもなるまい」というのが、正論であろう。第一、はじめから、足音を気にして馬で来れないような状況であるのなら、ことさら馬ハアレド徒歩デ来タなどと、女に訴えるはずはなかるうし、「汝を思ひかねて」との関連もよくない。(3)の風習説は、今までの説の中では、もっともはっきりとした説であり心ひかれる。すなわち、同じ巻11に載る

来る路は石踏む山は無くもがも吾が待つ君が馬つまづくに(11・二四二)

の歌に留意して、「馬つまづくに」を、単に馬がつまづくと解釈するだけでなしに、

塩津山うち越え去けば我が乗れる馬つまづく家恋ふらしも(3・三六五)

妹が門出で入りの河の瀬を速み吾が馬つまづく家思ふらしも(7・一一九一)

白栲ににほふまつちの山川に吾が馬なつむ家恋ふらしも(7・一九二)

の歌を合せ考え、「馬つまづく」「馬なつむ」を、「家恋ふ」という一つのしるしと見て、そこで引き返してみたり、あるいは一時中止してみたりする風習があつて、「恋人の所に通ふ男の方では、馬が

通いの歌の一樣相

つまづくことによつて、女の方のさしきはりを考へたりして引きかへすといふ事もあり得る」と考えるもので、二四二五の歌を

(馬で来てゐると、若し馬がつまづきでもしたら、引返さなくてはならない。歩いて来ればそのやうな事はない。少しぐらゐ遅くなることや草疲れることは、馬のつまづきでお前に逢へなくなることに比べればなんでもないことだ。だから私は)馬はあるけれども、歩いて来たのだ。お前を思ふ心に堪へないで。

と解釈するのである。

以上のように見ると、確かに今までの説における不満は解消されるけれども、それから直ちに、共通の信仰、共通の風習、共通の生活感情といった民俗学的解釈により、「若し馬がつまづきでもしたら、引返さなくてはならない」とするのはどうであろうか。あまりにも非合理的すぎはしないか。大浜説に挙げた、「馬つまづく」「馬なつむ」の例では、巻3の三六五番は、笠金村の旅における作であり、妹の守る家を離れて来ればこそ、馬がつまづくことを、「家恋ふ」故と見立てたのであり、また、巻7の一一九一・一一九二の作も、全註釈にいうごとく、家に妻を置いて出た旅の途での作と見られ、恋人の家へ往く趣の二四二五の歌とは、場合が違つたものであつてみれば、これから、上記のような風習を推定するのは困難である。馬がつまづく度に、引き返さなくてはならぬものならば、乗物として

馬は、用を果たすことができないことになるわけであり、馬に乗って恋人の許に通う

遠くありて雲居に見ゆる妹が家に早く到らむ歩め黒駒（7・一二

七一）

妹許と馬に鞍置きて生駒山うち越え来れば紅葉散りつつ（10・二

二〇一）

いで吾が駒早く去きこそまつち山待つらむ妹を去きてはや見む

（12・三一五四）

人の子のかなしけしだははますどらあなぬ浜渚鳥足悩む駒の惜しけくもなし（14・

三五三三）

等の歌は、最初からあり得ぬはずではなからうか。ことに三五三三

の歌では、行きなづむ駒をも、愛しい女の許に行くには惜しく思わない、というのであれば、なおさらである。大浜説に引いた

来る路は石踏む山は無くもがも吾が待つ君が馬つまづくに（11・

二四二一）

の歌における女の心配りは、おそらくは、風習・信仰から馬がつまづくことにより、恋人が引き返すことを心配したのではなく、つまづいて、恋人の大切な馬が痛みはしないか、また、その時に恋人が落馬でもして、怪我をしないか、などという心配であらう。

馬がつまづいて足を痛めて、山を越えかねたら、逢うことさえでき

ない。

石根踏む夜道行かじと思へれど妹によりては忍びかねつも（11・

二五九〇）

の歌から見れば、石根踏む山は、相当難儀な道であつたらう。

広橋を馬越しがねて心のみ妹がりやりて吾は此処にして（14・三

五三八）

は、馬が広橋を越えかねて、女の許に行きつくことができぬ男の、嘆きの歌であるが、待つ女としては、なるだけ男の通い路の安からんことを願うのが、恋の心であらう。

三

以上のごとく、私にとって諸説納得がいかないのであるが、それでは、どのように解すればよいのであろうか。そこで注意したいのは、この歌において、「馬はあれど」は「徒歩より吾が来し」の対称句にしかすぎず、一首の意は、「徒歩より」に重点があるということである。すなわち、馬ハアルノダガ汝ヲ思イカネテ徒歩デ来タという心には、馬デクレバ楽デ早イノダガ汝ヲ思イカネテワ、ザ、徒歩デ来タノダと、自分の恋情の深さを、強調して訴える心がある

と見られる。馬で行くのは、如何にも楽で早く、現在ならば自家用車で行くようなものであろうが、恋する者にとっては、時としてそ

の楽さ早さが厭うべきものでありうる。そのように、安楽に早く恋人の許に行くのでは、思い余る恋情をどうすることもできないので、一步一步難き山路をなづみ歩く、という、一つの辛苦を自分に与える行き方がとられたのではないか。逢えば恋情が充足する、というだけのものではないことは、

上つ毛野安蘇のま麻群かき抱き寝れど飽かぬをあどか吾がせむ
(14・三四〇四)

高麗錦紐解き放けて寝るがへにあどせろとかもあやにかなしき
(14・三四六五)

等の素朴な歌にも見られるごとくである。卷七には

住吉の小田を刈らす子奴かも無き奴あれど妹が御為と私田刈る
(7・一二七五)

という歌が載るが、ここに見られる、いとしい女の為に、奴を使つて刈るべき田を、奴はあるが、己が手づから刈る男の心と、女を思う心に堪えず、馬はあるが、己が足で歩いて木幡山を越える男の心とは、似ている。

ところで、恋人の許に通う歌を、万葉集の中に見てゆくと、通い路における難儀を歌った歌の多いことに気が付く。恋しい人の許に通う者にとって、途中の山野・川瀬は障害であつたらう。夜ともなれば、一層大変であつたらう。しかしなお、恋する者は、その障害

通いの歌の一様相

をも越えて相手の許に通う。土橋寛先生は、かつて、古事記歌謡「浅小竹原 腰泥む 空は行かず 足よ行くな」の歌の解釈において、それが恋の歌の詞章であることを述べ、山野の通い路の苦労を言う歌のパターンというものについて指摘されているが、^⑧ここで、通い路における辛苦を、自分の恋情の証しとして相手に訴える、通い歌の一類型というものを考慮すべきように思われる。その典型と見られるものに

隠口の 泊瀬の国に さよばひに 吾が来れば たな疊り 雪は
霧り来 さ曇り 雨は霧り来 野つ鳥 雉はとよむ 家つ鳥 鶏
も鳴く さ夜は明け 此の夜は明けぬ 入りてかつ眠む 此の戸
開かせ (13・三三二〇)

隠口の泊瀬小国に妻しあれば石は履めどもなほし来にける (13・三三二一)

の長歌と反歌がある。ここでは、泊瀬国によはひに行つた男が、女の家の戸口で、女が招じ入れてくれることを、懇請しているのであるが、その反歌に見られる「石は履めどもなほし来にける」に、注意すべきである。ここで男は、辛い通い路ナレド、アナタガイルカラコウシテ、石ヲフミナガラモヤツテ来タノダ、と通い路の困難を相手に訴えて、愛を得ようとしている。通い路の辛さを自己の恋情の証しとしての、くどきの歌となつている。また、卷十二には問答

歌として

ひさかたの雨の零る日を我が門に蓑笠着ずて来る人や誰(12・三

一二五)

纏向の痛足の山に雲居つつ雨は零れども濡れつつぞ来し(12・三

一二六)

と見えるが、ここでも、女の家門にあって男は、「雨は零れども濡れつつぞ来し」と、通い路での難儀を歌う。

かくしてやなほや罷らむ近からぬ道の間をなづみ参来て(4・七

〇〇)

は、その題詞に「大伴宿禰家持到_二娘子之門_一」作歌一首」とあるが、ここにも、「近からぬ道の間をなづみ参来て」と、通い路の辛苦を訴える方法がとられている。通い路の辛苦を、自分の恋情の証として訴えることは、すなわち相手に対する讚美に直結するが、この点から三一二六は、一面において、女を讚美する挨拶としての在り方をも持つ。

大伴家持至_二姑坂上郎女竹田庄_一作歌一首

玉梓の道は遠けど愛しきやし妹を相見に出でてそ吾が来し(8

・一六一九)

大伴坂上郎女和歌一首

あら玉の月立つまでに来まさねば夢にし見つつ思ひぞ吾がせし

(8・一六二〇)

では、相手を讚美する点から、恋歌としての類型を踏みながら、挨拶の歌としての在り方において、詠まれたものである。このような、挨拶歌としての在り方は、やがては

春二月諸大夫等集_二左少弁巨勢宿奈麻呂朝臣家_一宴歌一首

海原の遠き渡をみやびをの遊びを見むとなづさひぞ来し(6・一

〇一六)

右大臣橘家宴歌七首(ウチ第一首目ノミ挙グ)

雲の上に鳴くなる雁の遠けども君にあはむとたもとほり来つ(8

・一五七四)

橘朝臣奈良麻呂結_二集宴_一歌十一首(ウチ第二首目ノミ挙グ)

めづらしき人に見せむと黄葉を手折りぞ吾が来し雨の零らくに

(8・一五八二)

八月七日夜集_二于守大伴宿禰家持館_一宴歌

女郎花咲きたる野辺を行きめぐり君を思ひ出たもとほり来ぬ

(17・三九四四)

零る雪を腰になづみて参り来し験もあるか年のはじめに

右一首三日会_二集介内蔵忌寸繩麻呂之館_一宴楽時大伴宿禰家持作

之(19・四二三〇)

等、宴歌に転用されてゆく。先に挙げた一六一九歌について、「妹

なる語を、諸説坂上大嬢をさすとするが、これは、坂上郎女と見る注釈・私注の妥当であること、これら宴歌の表現（ことに一〇四〇の「思ふ子」、一五八二の「めづらしき人」）を見るに、明らかである。

自己の辛苦を相手に訴える恋情表現としての、通い歌の一類型は、さらに進んで

玉たすきかけぬ時無き吾が恋は時雨し零らば濡れつつも行かむ
(10・二二三六)

のごとく独白的になり、自分の恋情の意欲を己れに明かす形となつてあらわれもするが、また、自分で自分の辛苦を目守るような

露霜にころもで濡れて今だにも妹がり行かな夜は更けぬとも (10
・二二五七)

のごとき歌もあらわれる。さらには、

夕去ればひぐらし来鳴く生駒山越えてそ吾が来る妹が目を欲り
(15・三五八九)

では、あからさまな形で辛苦を述べず、ただ「生駒山」という岩根踏む山を詠むことにおいて、かろうじて類型を保っている歌も見られる。集中における、通い路の辛苦を歌う通い歌の類型の歌を、繁を厭わず挙げて、その様相を窺うと

1、山野・川瀬など通う路の難儀を歌うもの

通い歌の様相

(イ) 險しき山路

磐が根のこごしき山を越えかねてねには泣くとも色に出めやも
(3・三〇一)

石根踏む夜道行かじと思へれど妹によりては忍びかねつも (11・
二五九〇)

隠口の泊瀬小国に妻しあれば石は履めどもなほし来にける (13・
三三一)

妹に逢はずあらば術無み石根踏む生駒の山を越えてそ吾が来る
(15・三五九〇)

(ロ) 距離的に遠い路

かくしてやなほや罷らむ近からぬ道の間をなづみ参来て (4・七
〇〇)

ぬば玉の昨夜はかへしつ今宵さへ吾をかへすな路の長手を (4・
七八一)

不尽の嶺のいや遠長き山路をも妹がりとはばけによばず来ぬ (14
・三三五六)

(ハ) 川・橋の障害

小壘田の板田の橋の壊れなば桁より行かむな恋ひそ吾妹 (11・二
六四四)

飛鳥川なづさひ渡り来しものをまこと今宵は明けずもいかぬか

(12・二八五九)

直に來ず此ゆ巨勢道から石椅踏みなづみぞ吾が來し恋ひて術なみ

(13・三二五七)

直に往かず此ゆ巨勢道から石瀬踏み求めぞ吾が來し恋ひて術なみ

(13・三三二〇)

広橋を馬越しがねて心のみ妹がりやりて吾は此処にして(14・三

五三八)

大空ゆかよふ吾すら汝が故に天の河道をなづみてぞ來し(10・二

〇〇一)

(一) 草木の障害

父母に知らせぬ子故三宅道の夏野の草をなづみ來るかも(13・三

二九六)

馬來田うまぐたの嶺ろのささ葉の露霜の濡れて吾來なば汝は恋ふばそも

(14・三三三二)

小林に駒を馳ささげ心のみ妹がりやりて吾は此処にして(14・三

五三八或本歌)

(二) その他

おほろかに吾し思はばかくばかり難き御門をまかり出めやも(11

・二五六八)

2、天候に関しての難儀を歌うもの

吾背子に恋ひて術なみ春雨の零る別知らず出でて來しかも(10・

一九一五)

玉たすきかけぬ時無き吾が恋はしぐれし零らばぬれつつも行かむ

(10・二二三六)

ただ独り寝れど寝かねて白たへの袖を笠に着ぬれつつぞ來し(12

・三一二三)

經向の痛足の山に雲居つつ雨は零れどもぬれつつぞ來し(12・三

一二六)

3、ナツム・ナツサフという語を用いて難儀を歌うもの(※印は

12の例と重なるもの)

かくしてやなほや罷らむ近からぬ道の間をなづみ參來て(4・七

〇〇)

卷向の檜原に立てる春霞おほにし思はばなづみ來めやも(10・一

八三三)

大空ゆ通ふ吾すら汝が故に天の河道をなづみてぞ來し(10・二〇

〇一)

思ふにし余りにしかば鳩鳥のなづさひ來しを人見けむかも(11・

二四九二)

飛鳥川なづさひ渡り來しものをまこと今宵は明けずもいかぬか

(12・二八五九)

直に來ず此ゆ巨勢道から石椅踏みなづみぞ吾が來し恋ひて術なみ
(13*・三二五七)

父母に知らせぬ子故三宅道の夏野の草をなづみ來るかも (13*・三二九六)

等が見られる。

實際、苦難を越えて男が來れば、それだけ女は男に愛情を寄せるはずであるし、また、男は女への愛情が深ければ深いだけ、難儀をいとわぬことであろう。そこに、大空を往來する吾と、天の河道をなづみ行く吾とを、対照的に把えて詠んだ、二〇〇一のごとき七夕歌も、生まれてくるわけであり、当面の二四二五のように、馬はあっても、徒歩にてなづみながら木幡山を越えて來たという歌も、生まれてくるわけである。

直に來ず此ゆ巨勢道から石椅踏みなづみぞ吾が來し恋ひて術なみ
(13・三二五七)

では、女を恋つることに術を無み、真直ぐには來ないで、巨勢道を通じて、わざわざ難儀しながら來たという歌も生まれている。この三二五七の歌など、ことに、当面の歌の私解にとって参考とならう。

四

通いの歌の一樣相

このように、二四二五の歌は、恋人に自分の辛苦(すなわち恋情)を訴えるという、一つの類型に帰せしめうるものであったが、歌として二四二五が、これら一般的類型から抒情詩として独自に深化したのは、私解によれば、馬があるという事実をもちながら、わざわざ徒歩という労苦を己に課した、という点においてであったと考えられる。馬があるという事実を、そのまま受けいれずに、自己の恋情の深さとのかわりの上で、あえて徒歩で來るという点において、すでにこの歌は、内省的思惟的な傾向をもつ。まして、歌は、歌集というアンソロジーの中に、記載集録されることにより、その持つ意味は、それを享受する者の、文字を媒体とした、反省的な思考にゆだねられ、深められていくべきものである。そこに、この歌が類型的なものを越えて、独自の抒情性を獲得していったものと見てよからう。諸歌集には、どのように伝えられているか見てみるに、古今和歌六帖では

山城のこはたのりに馬はあれどおもふがためはあゆみてぞくる
(第二くに 人まろ)

と、四五句「おもふがためはあゆみてぞくる」という論理關係を成すまでに到っているのは、万葉集の主旨が、十分解っていたからにほかなからう。拾遺和歌集には

山科の木幡の里に馬はあれどかちよりぞくる君を思へば(第十九

雑恋 人麿)

と載り、「かちよりぞくる君を思へば」と、よみ方に違いを見せているが、その主旨に変わりはない。俊頼髓脳には

心ざしを見せむとよめる歌

をはたゞのいたゞの橋のくづれなばけたよりゆかむかへれわがせ

こ

やましなのこはたの里に馬はあれど君をおもへばかちよりぞくる

みちのくのどふのすがごもなふには君をねさせてみふに我ねむ

と、「心ざしを見せむとよめる歌」という中に録せられており、そ

の上、「をはたゞのいたゞの橋の……」の歌が、通い歌の類型の歌

として上に挙げた(1・6)

小墾田の板田の橋の壊れなば桁より行かむな恋ひそ吾妹(11・二

六四四)

と關係を持つものであることを思う時、さらに、私解の正当性は強

められるのではなからうか。梁塵秘抄には

春日山雲居遙かに遠けれど徒歩よりぞ行く君を思へば(第十二

神社歌)

と、拾遺和歌集において「山科の木幡の里に……」の歌の次に載る

ところの、「春日山雲居かくれて遠けれど家は思はず君をこそおも

へ」(万葉集11・二四五四「春日山雲座隱^{かすがやまぐもかくりてとほはともへはおもはずきみをしをもち}離^{わか}速家不^{はやいけ}念^{おも}公念^{おも}」)と、

二首を合わせた形になっている。このように、「馬はあれど」が遠けれど」に置き換えられることは、「徒歩より」に一首の主眼を置いているからであろう。古采風体抄では

やましなのこはたの山にむまはあれどかちよりぞくるきみをおも

ひかね 再撰本「里に」

と載り、夫木和歌抄には

山しなのこばたの里に馬はあれどかちよりぞ送る君を思へば(第

二十七 馬)

となっている。また、柿本集(群書類聚本)には

山しなの木幡の里に馬はあれどかちよりぞゆく君を思へば

と載る。

はじめに挙げた源氏物語の引き歌については、総角の巻では

かほるの夜もふけたればたゞ馬にて出させ給へと申給ふ心なり

(花鳥余情)

宇治の道なればいへり、馬といはんためなり(源氏物語細流抄)

とあるごとく、歌の意味とはあまり關係せず、用いられているよう

である。源註拾遺には

今案引歌拾遺にはこはたの里に馬はあれど、あれど万葉第十一に

はこはたの山にとあればいまは万葉に有まゝに用たり、万葉はか

ちにてゆく労をいはんとてこはた山に借て乗べき馬はあれどもと

いへり、今は御馬にのり給ひてはいかゞ侍らんといふことを木幡は宇治への道にて似付たる古歌もあればかくかけり

とあり、その出典について、拾遺和歌集・万葉集の別を考えているが、これは少し穿ちすぎであろう。紫式部にとっては、「こはた」と「うま」の關係を言うために古歌を引いただけで（おそろく、拾遺集もしくは古今和歌六帖によつていようが）、「山」であれ「里」であれ、さほど気にするに足りないことだったと思われる。ただ、「万葉はかちにてゆく、労をいはんとて、こはた山に借て乗へき馬はあれどもといへり」とあるのは、代匠記初稿本に「馬もかるまもなくかちよりくるは切におもふゆへなり。」と、時間的に解釈していたにせよ、万葉歌解釈にとつて興味深いものである。浮舟の巻では、匂宮が浮舟を恋つて、深更に雪の降り積む山道を越え来て、対岸の家に浮舟を伴つた明くる朝、

……よべ、分け来し道のわりなさなど、あはれ多うそへて、語り給ふ。

「嶺の雪みぎはの水踏み分けて君にぞまどふ道はまどはず

木幡の里に、馬はあれど」

など、怪しき硯、召し出で、手、習ひ給ふ。

とあるもので、花鳥余情に「君をおもへばといふ心なり」と載るように、あなた故に難儀な道をも越えて来たという為、木幡の古歌

通いの歌の一樣相

を引いたものである。

松田修氏は、その著『刺青・性・死―逆光の日本美―』の「性」
「1痛みと怨恨の機能」の中で、「被虐がともなわなければ、肉身のこの確実な痛覚がなければ、その心性の機能は、虚妄にすぎない」という日本の心性について、興味ある論を展開されているが、万葉集中にあるこの歌などは、やがてはそのような「何かを支払わねば、何ものかの獲得は虚妄である」という日本の心性につながつてゆく質の歌と見ることができよう。

註

- ① これ以外に、大系本ではアレドを陳述を示すものとして、
「」(……) 当時はすでに、アレドで一つの副詞を形成していたものであろう。つまり、アレドだけで、……は別としても、……はともかくさしおいても、の意味を示したものであろうと思う。この歌の場合も、山科の木幡の山を、馬があればいいだろうけれど、それは別として、歩いてやって来た、あなたをじつと思ひ慕っているに耐えないでの意と考えられる。」としているが、私は存在の「あり」と解する立場の者であり、ここでは、一応除外して考察する。

- ② 『立命館文学』第七十七号「古代民謡解釈の方法―倭建命御葬歌の原歌―」「古代歌謡全注釈古事記編」一五五・一五六P。